

Sustainable「Ghra」の研究——優しい環境学序説——

高 師 昭 南

A Study of Sustainable Ghra

Akinami Takashi

The goal of this paper is to create a more appropriate way to conceive environmental design. There are three dimensions necessary to articulate and achieve this goal. First, I introduce a new conception or motto to be associated with environmental design: "Sustainable Ghra". Ghra is an Indo-European word for 'green' and it connotes growth with the blessing of water, wind and the sun. Second, building upon the conception of sustainable ghra I demonstrate that devices created in accord with 'living systems' as the term is used in bio-physics, represent more environmentally appreciated creations. Finally, I emphasize and show the importance of a self-productive process in environmental design.

I 優しい環境学の地平

はじめに

当論文は、コミュニティ——小さな子供からお年寄りまでのいろいろな年代層の人々、体の丈夫な人も弱い人も含めた人々の集まり——の日々にとって、精神の環境汚染ともいうべきイライラや退屈から少しでも人々を守り、心地よい緊張、落ち着いた中にも華やかさと精神の充実をもたらしてくれる「ゆとりのある環境」の基本原理はどこにあるかの考察である。日々の問題であり、特殊なテンポラルな場の考察ではない。この問題に関して、環境設計学者は皆それなりの原理を示唆あるいは暗示してきたが、機能主義が支配的であったモダニズム以後の傾向は一言で言えば、生きられる世界の取り戻しとしてゲシュタルンの質^(*)、あるいはambiguityの質を実現することに心が払われたように思われる。ここでは「生きられる世界の取り戻し」を必須のものとした彼らの環境設計概念に共通に内在する原理の考察と、彼らが見落とし勝ちであったもう一つの大切な環境設計の原理「制作性」の考察が主となる。全体はいささかシンボリックな言い方を許していただくとして、「Ghra（*意味については、後述する）の維持可能性」の内にある

と見るが、それは構造の問題と行動性の問題に一応分けて考えることができる。構造面では、それが「生きられる世界のポテンシャルティ」を保証しているかどうか、行動性では、生きることのうちに作ること、育てることそして大切にすることが一連のこととして組み込まれて自然なかたちになっているかどうか、つまり「制作する」がどれだけ日課的なものになっているかどうかが問題になろう……。・・。

抑止すると作り・維持する

環境の問題は今日、生態学を中心とする自然科学だけのテーマでなく、社会科学、人文科学のテーマともなっている。環境社会学、環境倫理学、建築・環境設計（建築学、都市計画、環境美学、環境心理学を内に含む。本論では、ただ環境設計と表記する）の成立である。

言うまでもなく今日の環境破壊は、人類の存続が問われる地球規模の問題として重く我々の上にのしかかっている。資源と環境と経済成長のトリレンマをどう解決するか。経済成長の欲望を捨て切れない限り、絶対性をもっていると認識されるこの人類の生存危機を前にして、国連は人類の共通の実現目標を‘Sustainable Development’の標語でくくった（1992年リオデジャネイロ、地球サミット「国連環境開発会議」）。だが、これは主に生存環境に破壊的に働く＜攻撃的な＞経済主義の活動の今日的な条件、ありうべき規範を訴えたものである。攻撃性を持たぬ分だけ見逃されがちであるが、生存環境の半面には心地よい睡眠を極とする心寛やかになる「ゆとり」の時空——優しい環境——の問題がある。

ホスピスの思想は優しい環境の顕著な一例であるが、生まれると同等に、優しく「死ぬ、朽ちる」ことを直視し大切に扱う思想の復活と、その生存に対する本質性が見直される必要がある。環境設計の原理の一つとして、「造ったと同じだけの費用を管理維持にかけなさい」があるが、実情は造りっぱなしが圧倒的である。環境設計の思想が現実の、市民のものとなっていないことを証明していると言えよう。時代は大きく変わって来てい、また変わらなければならない。近代のスクラップ・アンド・ビルドの考えの多くは、目先の経済優先に走るだけのものであり、優しい環境実現のために今、反省しなければならない。なぜなら、優しい環境は、年月のもつ深い味わいを大切な要素の一つとして成立するものだからである。

現存とは自己の住まう場所を持つことであるとはボルノウの言葉である^(*)が、その住まう場所に関して、「人は家に住むというより町に住む」という言い方がある。もちろんボルノウは正しいがまた、それがCommunityと言えるに足る（年月の深みをもった）Communityがあることを前提とした真理であることを見なければならない。オギュスタン・ベルグが「風土」の概念でとらえんとしているものも、基本においては同じである^(*)。そこには、大切にする・「育む」という内実において開花し続ける環境がある。

では優しい環境の思想を等閑にしている社会とは、いかなる社会であろうか。現代の都市を見ればよいわけであるが、それは物事、環境を大切にすることを忘れた社会である。見てみよう。人手を省くために導入されたコンピュータがかえって、事務量とストレスと廃棄コンピュータの山を築く。環状八号線を走ってみる。それでなくとも排気ガスのために黒ずみ元気の無い中央分離帯の植え込みに、ジュースやビールの空き缶やビンその他のゴミがかたまりとなって捨てられている。「ゴミはゴミをよぶ」である。環境考古学者の安田喜憲は、文明の崩壊に森林破壊が大きく関わっていることを明らかにするとともに、今まさに新たな森林破壊の時代であることを警告している^(*)。環境社会学者の大沢真幸は現代文明と都市がかかえる問題を、東京有明の満

杯となっているゴミ処理場から報告する中で、現代の経済発展の意識が構造的に、都市生活に「のきさしならない」状態を引き起こしていることに注意を促している^{(*)5}。

何がどう関連しているのか。現代の市場社会はモード値を操作することで、欲望創出機構を維持する^{(*)6}が、別の言い方をすれば消費することと「使い捨てる」を直結させつつ、使い捨てられた様を意識から遠ざける仕掛けにおいて、社会を維持する。社会学者、見田宗介の言葉を借りれば、「環境と生態系の問題を正視しないこと、見えない地域や階層や世代たちの犠牲へと間接化し、遠隔化し、不可視化する現代社会の自己欺瞞の光学の内に自閉して」ということになる^{(*)7}。以上は、「死・終末」を「誕生・始まり」とひとつながりのものとする生命的自然観を切り捨てたエリート思想——その最たるものは現代の都市文明および科学文明の最も大きな土台となっているキリスト教であるが——と深く関係する。そこでは、時間は循環することなく、断絶し、永遠の救いにあずかるか、あずからないかだけのこととなる。生命がそうであるような、循環性、「不安定を介して安定を形成する」も、生物の自然である「ゆらぎ」やambiguityも否定される。直線的時間性のもとで、勤勉や目的的行動以外の活動の価値が切り下げられる。

遠心的能力の開発と求心的呼応の充実

こうした社会は私たちの心理、意識、行動にどのような影を落としているのだろうか。

昭和63年の総理府広報室「国民生活に関する世論調査」は、たしかに豊かになったかもしれないが、「ゆとり」の実感がないという国民の反応——平成10年の現在むしろより深刻なたちで蔓延する実感——を伝えているが、このことは、我々の生活には豊かさを「ゆとり」にかえる、リズムに裏打ちされた生活行動の様式が、十分に育ってないということを意味する。別の言い方をすれば、真の文化的環境が展開されていないということを意味する。

豊かさの背景を覗いてみると、経済優先の生き方ということになるのであろうが、企業のペースに自分のペースを合わせて生き抜こうとしている我々の姿が見える。そこには、世の中の流れに置いてきぼりにされ脱落することの恐ろしさに勝てない心理、高度大衆消費社会の情報による需要の自己創出機構つまり「金銭快楽中枢」を刺激し続ける社会、利潤追求に明け暮れる企業の論理があり、それらが複雑に絡み合っている。事情は複雑でも利害は一致し行動はかえって単純化されている。倫理が欠落したままバブルにまで行き着く。利潤の多寡のみを問題とする結果至上主義の横行である。

結果至上主義のあおりをうけて、日常の目的的行動は加速し、先へ先へ、もっともっととなる。本人が気づかぬうちに心身の緊張は悲愴なまでになる。ここまでくると、操作していると見えて操作されていることにしかならない。問題は、頼れるものは自分だけだという唯我独尊症状に陥ること——他者への信頼を喪失することと相関する結果依存症である。結果至上主義は「生産」主義と結合して、欲求との好ましいバランス・シートを作り出す過程の楽しさ——手応えと思わぬ発見の楽しさ——つまり「制作」を通して成熟する能動的受容性としてある身体（知覚）を失い、欲望の奴隷となる。物と時間と情報の半ば奴隷になってしまっている。

現代社会のこうした問題をいち早く指摘した一人が、今世紀を代表する思想家テオドール・ヴーゼングルント・アドルノである。彼は、芸術の合理性を、非合理に行き着く宿命にある管理社会の合理性との関係において論じる中で、読みようによれば今日の環境問題の哲学的解明に先鞭をつけたとも言える。同一性という概念——全てのものを自己の「理性」に同一化される（従属する）受け身の存在と考えること。17世紀の科学革命に始まるヨーロッパ文明のかつての

姿勢、普遍主義を貫くもの。大量生産、大量消費は同一性の産物である——で管理社会の行動原理を説明し、芸術はそれに対して自己と他者・自然を親和的近似値において「和解」させるものとして、非同一性の原理に立つものと見た。彼の主張は、他者・自然と自己をして、互いに「かけがえのない」存在へともたらし過程に芸術が深く関わっていることを意味する^(*)8)。

今村仁司の言葉を借りれば生産的理性——合理性に則ってつくりあげられた頭の中の（世界についての）青写真を絶対としてそこにはないものを排除していく行動——専制の世界観である^(*)9)。対極にあるのが、制作的感性を大切にしている世界観である。それはメルロ・ポンティの言う生きられる生活世界つまり知覚のポテンシャルティ——行動を遂行し感情を体験するというバランスのとれた身体の二重の能力を介して、対象に「深さ」と「奥行き」を与えつつ、対象の今まで気づかなかった姿を発見すること。中井正一の使う「味到する」が対応しようか——が生かされる場の問題である。それをここでは、Sustainable Ghraという言葉でおさえておくことにする。ついでながら、Ghraとは、アリア語で「生長する」の意味であり、緑Greenの語源である。それならば、アメニティという概念があるじゃないかという議論もあろう。確かにこうした環境概念として1960年以降アメニティが広範に使われている。しかしながら、18世紀後半にまで遡るこの概念が今日でも「認識するのは優しいが、定義するのは難しい」と言われる状態にある^(*)10)ことは、環境を科学的に考えていこうとする時、必ずしもふさわしくない。アメニティは、「居心地のよさ、快適性」と言った具合に心理的判断に基準を預けてしまう傾向にあるので、恣意性を免れず、構造の原理に迫ることが不可能である。あえて、Sustainable Ghraという標語を掲げる所以である。意味するところは既に一部述べてきたところであり、さらに次項以下でも具体的に説明していくが、構造論としては生物物理学でいう「生きている状態」がこれに当たる。Ghraという耳慣れない言葉を敢えて使うのは、太陽・風・水の恵みの象徴としての緑（それが本来の意味である）が、その契機を与えてくれる「育てるという行為性」の環境における本質を強調したい意図があって採用。象徴性を込めた表現と受け取っていただきたい。

演出としての環境設計

アドルノとはまた別の視点から、ゆとりを欠く日常の行動の本質（その本質は管理社会において先鋭化する）の何であるかを突いたのが、山崎正和の美学である。彼は、演技的行動（アドルノの芸術という概念に対応していると見ることもできよう）——美しい、立ち居振舞いや行動さらに舞台の演技など——と日常の行動の違いを、後者が目的的行動であるに対して前者が（知覚がそうであるように）目的を括弧に入れた行動であることによって生じるところのリズムの問題として論じた。つまるところ日常の目的的行動が結果主義に支配されて、心身のリズムを寸断する傾向にあるに比して、演技的行動はまさにリズムの形成そのものを目的とする行動であることを明らかにした^(*)11)。リズム——展望にして没入、動にして静といった両義的緊張様式としてのリズムは、どんなに早く動こうともその内にゆったりした大きさをもつものとして、生活と「ゆとり」を結びつけるものと言えよう。舞台の演技（スポーツでも同じであるが）で、動きがせわしくなく、ゆったりとした美しさがないとき、決まって結果を気にする、結果ばかりに目がいくことが、先人によって指摘されているが、「ゆとり」のおおもとが何処らにあるかを示唆していると言えよう。日常の行動は目的的行動たるを免れないが、結果主義からの解放あるいは結果主義の調整が、先ず言われる所以である。

ついでながら、山崎の理解は我々に、従来の「ゆとり」概念が不十分であることを知らせる。

「ゆとり」を辞書で引くと「何かをしたあと、まだ自由に出来る空間、時間、気力、体力などがあること。余裕。」（新明解国語辞典）と出てくる。辞書が示すのは、エンゲル係数、余暇率など量的に処理される近代の物理的・社会的「ゆとり」にも対応した概念であるが、要するに「余」が「ゆとり」であるという考えである。だが本質的に大切なのは、「何かをしたあと」というよりも、「何かをすることを通して」ということであろう。文化的存在としての人間にとっては当然、そうした「何かをすることを通して充実する」ゆとりの実質が求められねばならないだろう。充実としてある「ゆとり」、それは繰り返しもなるが行動の後に残る「余裕」ではなく、行動そのもののうちにリズムとして発現しているものであろう。だが、間身体的なものとしてのリズムの本来は、「予感・予期・待たれている」時空と一対のものである。

20世紀を代表する演出家の一人ピーター・ブルックは、『なにもない空間』^(*12)で、舞台に、装置と人とドラマがもち込まれる時、「何人あるいは何事かの登場が待たれている」当初の「なにもない空間」の心地よい緊張を台無しにしてしまう上演を強く糾弾した。だが、「待たれている」時空と言っても、勘違いしてはならない。彼の主張を生物物理学の言葉で解釈すれば、心地よい緊張の自己触媒機能を媒介として、当初の心地よい緊張を増幅することで動的秩序の自己形成がなされなければ、上演の名に値しないということである。全裸が売り物になったミュージカル『おおッ！カルカッタ』は、全裸を見てしまえば、あとは精神の環境汚染ともいうべき退屈以外の何物でもなくなる。生理学者ウェーバーの有名な法則「動物の感覚は刺激の大きさそのものを感じるのではなく、その対数を感じる」は、真理であり、刺激はそのままではより以上の刺激においてしか我々を退屈から救いはしない。「待たれている」時空とは、猫が小鳥を狙うように何かに焦点を合わせた「待つ」ではなく、 α 波が検出される夢見状態がそうであるように後になってそれが自分によって「待たれていた」何かであることを知る、そうした受動的能動性の状態である。先出の「知覚のポテンシャルティ」が充分に顕在化した状態である。見えてくるのであり、聞こえてくるのであり、響いてくるのである。そこでは、刺激が単なる刺激としてではなく（生理的基盤への癒着を離れて）、自己触媒的に増幅し、絶えずよみがえり泉のように湧出する精神の生命力の旺盛に働く信号へと、変化する機構が実現していることが言われる。

以上のことは行為が、環境の当初性つまり「待たれている時空」との連続性、それこそSustainable Ghraにおいて検証されねばならないことを教えている。最初、人は自然の一部として自然とともにあったと言えるが、やがて自然からの独立性を高め、自然を征服され操作される対象とするに至る。断絶を旨とするデカルトの「我思うゆえに、我あり」であり、F・ベーコンの「活動性のある（行動に資する）原理の追求」において確立し、今日に続くいわゆる科学革命の世紀の幕開けである。当初性つまり季節に一例を見るように「待たれている」という環境の当初性を無視して、他者・自然を一方的に時間を超えて利用できる資材とする。結果、環境において相手の表現を待つて成立するコミュニケーションあるいは、脱中心化と即応する共感的同調の深化がもたらす「味わう」姿勢が欠落する。文明史家のルイス・マンフォードは、ポンペイの遺跡を見て、「それは廃虚となつた現在ですら、アメリカの都市の中心地より廃虚の印象を与えることが少ない」と書いている^(*13)。科学革命の世紀の思想を環境設計の分野で実現したのは、ル・コルビジェであるが、その彼の環境設計の思想の延長上に築かれた多くの現代都市とその要素としての「ユニバーサル」様式の建築への批評でもある。風土性を持たぬあるいは否定したル・コルビジェの都市計画に、「虚脱感と人為的な不自然さ」を見てとったマンフォードの思想は、例えば環境設計学者クリストファー・アレグザンダーのもとで、「成長する全体性」の概念となっ

て現実化されつつある^(*)14)。

II 優しい環境学の実践原理

Sustainable Ghraとスリットの入った閉空間

「ゆとり」には基本的に二つのカテゴリーがある。一つは、化粧がそうであるように環境としてもまとまりを得て「落ち着いた中に華やいだ気分がある」である。もう一つは、「心寛やかに憩う」である。実のところその両者は、一つのものの双面として活動に顔を向けているか、休息に顔を向けているかの違いによって現象しているものなのであるが……。

では、どのような（住まうに関係して）環境が私たちに、「ゆとり」をもたらすのであろうか。「ゆとり」をもたらすと考えられた幾つかの例を引きながら、そこに実は共通の原理とでもよぶべきものが働いていることを明らかにしたい。景観工学の篠原修は、日本におけるまちづくりの原型を求めて、中心部に川の流れる景観をイメージする^(*)15)。もちろんそれは、コンクリートで護岸工事のされた川ではなく、自然性をもった「ゆるやかな流れ」をもった川である。アメリカに見るラドバーン計画では、幹線道路は近隣住区の外周を走るようにして、住区内での車の制限速度は徐行速度を余り越えないように制限しつつ、住区内道路と駐車場の関係にクルトザック方式を多用している^(*)16)。ラドバーンだけでなく今日では、いろいろな地区で、「ゆとり」のためには住区内の自動車乗り入れは出来るだけ制限し、走る場合でも速度制限は絶対の条件とされ、その具体的方法として、シケインやバンプを活用したり、さらにはオランダで生まれた「ボンエルフ」^(*)17)を採用している。逆に、自動車が疾駆し易いように幅広く直線的な道路が都市を貫通する環境（バロック都市はその典型であるが）は、「ゆとり」という点からは疑問視されている。「ゆとり」をコミュニティ設計の第一原理とする多くの都市環境設計者が、理想型として注目するのはヨーロッパ中世の城壁で囲まれた都市である^(*)18)。つまり外部と内部を分ける境界がはっきりしてい、その境界から内の中心に向かって求心的に秩序が整えられている世界である。そこには更に入れ篭構造的に公共の広場があり、私の中庭がある。城壁で囲まれているとは言っても、もちろん出口と入口がある構造——これから少し詳しく見ていくが広場や中庭にも共通する——である。ゆとりの空間として屋根裏部屋というのもあげられる。「ゆとり」の環境として日本人なら、いわゆる茶室をあげるかもしれない。樋口忠彦のあげる「山の辺」——それは野点の傘の内あるいは長い屋根底の出た室内から、明るく開けた景色を眺めるときの景観状況と共通する——もある^(*)19)。

都市、町、道路、住居などの在り方のうちから、多くの設計家が経験則として「ゆとり」の環境を考えるに共通して注目する幾つかの事例をあげたが、そこには通底原理などあるのであろうか。あるように思える。それは、化学者のイリア・プリゴジンや清水博が究明した「生きている状態」の構造である。

では、「生きている状態」とは何か。量子力学のシュレディンガーが『生命とは何か』で、物は時間の経過とともにエントロピーが増大して崩壊に向かうのに、生命体はなぜそうでないのか。「負のエントロピーを食べている」としか考えられなかったその負のエントロピーの正体を科学的に明らかにした科学者の一人が、非平衡開放系の問題を論じた「散逸構造理論」のイリア・

プリゴジンである^(*)20)。彼の理論の内、当座関係するところを掻い摘んで説明すれば、生きている系とは、熱力学的に見れば例えばA、Bという二つの環境体に挟まれ、それらから影響を受ける系の問題であり、系がどちらとも釣合おうとする（そこで系内部には、ゆらぎが生じるわけであるが）環境体A、Bの＜差異＞がある一定の域値を超えると、その系にはA（あるいはB）から自動的に＜エネルギー＞が流れ込み、系内を経巡って（例えば、エネルギー＝養分が流動を通して系内部の各部分に浸透していき）、やがて環境体B（あるいはA）へと流れ出ていく。エントロピー＝不要物となって排泄される。生体は絶えずこうした「差異」を生み出すべく操作しているというわけである。言ってみれば、入口と出口のあるそれなりに閉じられた系があり、系内では入口から出口に向かって「ゆるやかな」流動がおこるようなポテンシャルリティをもつ構造体（私はこれを、スリットの入った閉空間、と呼びたいと思うが）である。環境の構造に置き換えてみると、その条件は、それが接する互いに異なる二つの世界を内に導入しつつも＜それなりに閉じられた領域である＞ということである。その意味で、そこが中継＜領域＞とはなっても、単なる通過地域であってはならない。分かり易い例の一つは、かつての宿場町である。街並みなどの場合、入口部と出口部に門を設ける（例えば横浜中華街）だけで（さらにはその門＝アーチウェイをセット・バックして遷移的な半分私的半分公的空間を設けるだけで）、その構造は立ち上がるが、もう一つ大切なことはそこが領域の内実を持つべく、そこを流れる物事の速度が人間のスケールを越えないということである^(*)21)。地域というよりあくまで領域であり、流れがあるということであり、しかもその流れが人間の歩行速度を余り越えないということが原則である。最もよくこうした原則をふまえた街並みのデザインとして、オランダに生まれたボンエルフの工夫がある^(*)22)。元に戻って、スリットの入った閉空間であるが、ミラノのドゥモからスカラ座に通じるアーケイド、ガレリアの魅力もこの領域性に関係する。「ゆとり——落ち着いていながら気分が華やぐ」の時間が流れるのである。では何故、落ち着いていながら気分が華やぐ——心地よい緊張——が生まれるのであろうか。清水博『生命を捉えなおす～生きている状態とは何か～』^(*)23)は、プリゴジンが系そのもののありようを問題にしていたのに対して、むしろ系内部の分子の振舞いについて、つまりは生きているということの仕組みについて分かり易く教えてくれている。一言でいえば、要素間の動的協力性が起きているかどうかということである。死んでいる状態では、分子＝要素が動いていないのではなく、てんでんばらばらの方向に動いて（いわゆるブラウン運動状態にあって）互いに互いの運動を相殺するようになっているのに対して、生きている状態では要素＝分子の動きが一定方向に揃っていることで、生きている証拠である（マクロな）流動になっているというのである。ここで大切な問題が一つある。それはこの動的協力性は、（人間社会の動きでも分かりやすいが）不安定を介して生まれるということである。生体は自らこの不安定状態（ポテンシャルエネルギーの高い状態）を作り出すことで、自然に安定状態に戻る際、分子の動的協力性を生み出す。その際、ゆらぎを介して自己触媒的な増幅作用が生まれて、流動は内にリズムを秘めることになる。社会的次元では、この不安定状態を生み出す過程は、祭りがそれにあたる。ともかくも、精神の環境汚染ともいうべきイライラや退屈とは、つまるところ分子あるいは要素に相当する「関心interest」がブラウン運動状態にあるということ、そして「ゆるやかな」流動、排出の機構が成立せず、従って自由エネルギーの流入が妨げられていることの結果でもあるということである。環境設計の次元で言えば、分子や要素に相当するのは人や車である。以上は、死せる場所として、まったく閉じられて出口の無い空間、あるいは逆に通過に利するばかりで明確な領域性のない空間の問題を照射する。特に後者は、高速道路に寸断され

た現代都市の在り方に象徴的であるが、そればかりでなく抜け道としての道路を抱える近隣住区の問題ともなっている。不安定性と言う点からは、治安上の安全性はおさえながらも、暗、迷路的、見え隠れなど 求心的呼応の工夫を積極的に評価し組み込んで行かねばならない。なぜマンフォードが、そしてアレグザンダーら多くの都市設計者が、領域性を持った中世の都市（言ってみれば、城壁に囲まれたスリットの入った閉空間）に目を向けたのかの理由がそこにある。以上はあくまで原則的なことの理解であり、現実に対応するためにはテクニカルな課題として、領域の大きさ、スリットの幅、人と車の密度、流動の速度などが相互に微妙に関係する点を具体的に把握しなければならない。

「ゆとり」が、スリットの入った閉空間といかに関係しているか、もう少し例を見ておきたい。環境設計の芦原義信はガストン・バシュラールの内密性——想像を喚起するために、かえって小さなものの内に豊かさが宿る——を受けて、屋根裏部屋や茶室の充実を語っている^(※24)。都市の再生を考えるに、原広司は集落に注目したが、集落を集落たらしめているものは何であろうか——そこにも抜き差しならぬ問題として領域性やスリットの入った閉空間性を指摘できよう^(※25)。いささか繰り返しもなるが、ここではこうした問題の一つの典型ともいべき「中庭」、次に都市の中庭とも言うべき「広場」の問題を通して、スリットの入った閉空間モデルと「生きている状態」の関係をより具体的に見ておきたい。

10チャンネルの隠れた人気番組「建物探訪」では5回に1回位のかかなり高い頻度で中庭あるいは中庭的なものがとりあげられているが、そこで「自然の採り入れ」と並んで決まったように、「コミュニケーション云々」が住む人から聞かれるのは何故なのだろうか。では改めて中庭とは何か。何が「ゆとり」をもたらすのか。「生きている状態」とどう関係するのか。周知のように、砂漠の風土にあるイスラム世界において、一般に中庭は対自然を含む外での〈闘い〉から解放されたコミュニケーションの場として大切にされている。理想にいたっては、「楽園として生命の泉に沐浴する——中心に生命の源である水＝泉を配置するのもそのため——」いわゆる中庭庭園になるわけであるが……。それはともかくとして、イスラムの影響を強く受けたスペインを通して、イタリアをはじめとする西欧諸国も、「解放された内密性」ゆえのゆとりの装置として中庭が多くの家に取り入れられている。同じ囲地でもイギリスなどのバック・ヤードとは違って、はるかに人工性が高いが、それはそこに人が居る居ないにかかわらず内なる広場として、人と人とのコミュニケーションの場所だからである。バック・ヤードはむしろ人が自然と対話しつつ「育む＝制作性」優位の場所だからである。中庭に戻って、それは街路から内部への精神的次元の〈優雅な〉転換をなさしめる門などの装置を介して——日本で言えば玄関で靴を脱ぐに相当しようか——街路行動の緊張、互いの心の隔たりを解消して、静かにくつろぎ歓談する場所が中庭であると言われる。そこに入ると外の喧燥が嘘のように感じられて初めて、中庭といえる。事実、そのように出来ている。中庭——建物の壁が四周を囲み、そこに入るには物理的にはそうでない場合も門をく（心理的には）潜って＞入る、上だけが空に抜けている構造体である。しかし、それがそれなりに閉じられた空間であると言うことは、エントロピーの増大する空間であるということでもあり、そのままでは下手をすれば死んだ空間にもなる。アレグザンダーはその危険性を見抜いて注意を促す。1 屋内と屋外との間に曖昧な領域のない場合、2 中庭に出るドアが一つしかない場合、3 中庭が閉鎖的すぎる場合、には中庭は失敗する可能性がある。従って、「どんな中庭でも、つねにより大きな屋外空間を見通せるように配置すること、周囲の建物に少なくとも2、3ヶ所ドアを設け、これらのドアを結ぶ自然な通路が中庭を横切るようにすること、さらに

中庭の一辺のドアの脇には、屋内と中庭の両方に連絡する屋根つきのベランダかポーチを設けること」など……^(*)26)。そこには、プリゴジンや清水博が明らかにした生きている系（構造体）の仕組み、つまりそれなりに閉じられた場所、入口、ゆるやかな分子の動的協力性をもった流れ、出口を見てとることは難しくないであろう。以上に対して、外なる中庭——都市の居間＝都市が所有する部屋のうちで最大かつ最も公の部屋——ともいうべき広場ではどうであろう。

広場——それは人々が目的志向的行動とは異なり、日本の界限がそうであるようにブラリと出掛けて行って、人とコミュニケーションして楽しむくつろぎの空間である。では、その構造上の条件はどのあたりにあるのか。古典『広場の造形』（カミロ・ジッテ著、英訳本1965年）があるが、芦原義信の方がよりの確であるので芦原の定義に従うと、「第一に、広場の境界がはっきりしていて「図」となりうること、この境界線は建物の外壁であることが望ましく、単に視界を遮る塀であってはならない。第二に、空間の閉鎖条件をよくするような「入り隅」のコーナをもって「図」となりやすいこと、第三に、境界まで舗装が完備していて空間領域が明瞭で「図」となりやすいこと、第四に、周囲の建築にある統一と調和があり、D/Hがよい比率をもっていること、である。」^(*)27)。建築・環境設計学の安藤忠雄は、都市問題を論じて、公共の場が都市の中心にくることを、そして人々が使いこなせる都市であるべく、そこには可能性を刺激する「ゆとり」があることを繰り返して述べている。公共の場の一つが広場であり、たとえばイタリアの人々が実にうまくそれを使いこなしていることを例にあげている^(*)28)が、使いこなすためには時間をく漁るべく規模、かたちなどに法則があるようだ。構造の原則は歩行者街路を「入り隅」部から引き込んでいる、四周を建物に囲まれた空間である。建物の窓と入口は広場に面しているので、ポテンシャルとしてそこにはく見る——見られる>が呼応する「劇場」が仕組まれていることになる。典型例は、世界で最も美しい広場の一つと言われる（大競馬祭パリオで有名な）シエナのカンポ広場であろう……。だが、ただ大きさだけから見れば、カンポ広場にしてもベニスのサン・マルコ広場にしても少し大きすぎるかもしれない。原則的には、もう少し小さな空間——人の顔が判別でき、外の車の騒音があったとしても、声の届く距離の大きさの——でなければならない。「広すぎるときびれたように見え、またそう感じる」とアレグザンダーは注意する^(*)29)。

広場に関連して、「ゆるやかな」流動性の問題を見ておこう。入り隅から広場に引き込まれる街路の、幅と両脇の建物の高さの比率及び窓の方向が先ず問題にあがる。経験則として、歩行者街路の幅は両脇の建物の高さより狭いこと、窓及び出口が街路に面していることが理想とされる。すべては「ぶらつく」速度つまり歩きながら立ち止まる速度を作り出すためである。そこでは、人とコミュニケーションが主役である。このことは逆に、幅広い道路が走る都市を想像してみるとわかる。例えば放射状に道路が交差するパリの凱旋門あたりを考えた場合、何が主役であろうか。魅力があるにしてもそれは、「ゆとり」とは別のものであろう。自動車のスピードにしる何にしる人間のスケールを越えるものは、それなりに快感をもたらし都市にとっても重要である場合が少なくないが、一方で人は、「ゆとり」あるいは「憩う」を求めて人間的なスケールの行動に向かう。こうして全体的には、文明的な遠心的能力開発のシステムと文化的な求心的呼応充実のシステムのバランスのとれた組み合わせの上に、よりよい環境システムが模索されることになるが、コミュニティにとって第一義なのは、あくまで後者の中庭、広場などの求心的呼応充実の環境システムなのである。それが、「生きている状態」の構造と同一であることを見てきたわけである。

Sustainable「Ghra」と制作性

ありがたいという感謝の気持ちが近年欠落してきたことは、やはり精神的ゆとりの無さを示していよう。文明史的観点から言って、従来の生産的理性中心の操作主義が「物質的豊かさ」を生み出すことにはあるいは功があったかもしれないが、ありがたいという感謝の念に現れる「ゆとり」は今日、制作的感性を抜きにしては実現を考え難い。なぜならば、環境によって充実をaffordされるべく謙虚な自分になること（日本人流の言い方では無私あるいは自然＝じねん）は宗教を除けば、制作するという行為において最も確かであるからである。そこらあたりを見ていこう。

画家はものを見ることによって描きはじめたとしても、描くことによってはじめてものが見えてくることを体験する（市川浩）。

「制作が現実を開き、生み出すのである。制作することによってはじめて把えられる現実というのがあるのだ。」^(*)30)市川のこの言葉は、知覚のポテンシャルティと制作の深い関係を示唆する。環境設計は、知覚のポテンシャルティとしての現実開示性と関連するが、平たく言えば、見る・聞くの世界から、見えてくる・聞こえてくる、一言で言えば「響いてくる」世界への誘いである。制作とは、この「響いてくる」世界へと移行する最もオオソドックスで的確なアプローチである。

ところで、コミュニティの環境設計は今まで述べてきたこととも関連して、以上の哲学の上に展開すべき性格のものではないかというのが私の主張である。もしこのことが認められるのならば、「育てる」を中核に置くSustainable Ghraという考えが重要であり、まったく対象として住民によるコミュニティ「制作」が当然考えられて然るべきであろう。もう少し具体的に、どのような理解のもとに、どのような事柄を指しているのだろうか。排他的にならない限り共同体の一体感・連帯感は優しい環境にとっての一大指標であるが、それは地域における（外観上の多様の統一につながる）基本工法の統一によるばかりでなく、地域の皆が一つ事に向かって何かをする行為的共感性によって実現する。集約的な行為的共感性として「町づくり」そのものを、また、付属のものとして昨今の手作りを旨とする公共に開かれた姿勢をもつガーデニングを視野に置くのも悪くない。

「育てる」を通して手応え（味わい）、発見、コミュニケーションの三位一体の体験を作り出していくこと、それが制作性であり、その為の契機として町づくりや上に述べたようなガーデニングを考えるということである。「ゆとり」の一つの表現に、「これは私たちの町です」と言えるということがあげられる。そう言えるためには、自分たちお互いがその町の大切な一部であるという親近感や、はっきりとは指摘できないが何か自負に近い気持ちの裏付けがなければならない。出来上がったものとして与えられただけの住宅地には、どんなに奇麗であっても、どこか空々しさが残り、そうした誇りと余裕のようなものが感じられない。何故だろう。そこには年月をかけて出てくる味のようなものが欠けているからであるが、味となるのは、なによりもその地域を「住み処」とし「かけがえのないもの」として大切に育てる姿勢がどこまで住民の間に浸透しているかによると言ってもよい。それは半端でない、それなりの年月と地道な努力を必要とする。都市は作品であるとはよく言うが、近隣住区もまた作品なのである。

作品性をもってコミュニティもまた、コミュニティと呼べるであろう。このあたりまえである

ことが、あたりまえでないところに、コミュニティの環境設計が自らの過去を反省する必要がある。機能主義と専門家主体の環境設計を超えた新たな環境設計の概念が今、必要とされる所以である。素人は分からないのだから黙っている！式の従来の町づくりに替わって、住民が主体——積極的に発言し責任を持つ。もちろんアイデアの具体化の段階では専門家の技術に頼るのであるが——となって「育てる」町づくりが、ここでいう制作である。私は、この制作行為こそ、新しい環境設計概念の中心にあって然るべきだと重ねて強く言いたい、それもこれも「ゆとり」のある環境の要諦がそこにあると見るからである。先にもふれたように、ゆとりとはリズムに貫かれた生活行動のことであるが、持続的に生産的理性を中和する制作的感性の場として、＜育てる＞「町づくり」はそれなくしては個々の生活リズムが増幅されない共同体の生活リズムの根底となるもの、つまり内発的な公共性を作ることになるからである。

ところで文明史家ルイス・マンフォードは、現代社会における制作の意味を重視しているが、それは今日の我々がいわば社会的心理的治療を必要とする神経症患者——この事実を我々は否定できないであろう——であるとの認識に立っているからである。制作は、その造形的な仕事のもつ反復的な性質において、治療の効果をもつ、と言うのである。「神経症患者に正常な活動と精神の平衡を回復させるために今行われている作業療法が、新石器時代の技法——機織り、塑像作り、大工仕事、陶器製作——を利用していることは、おそらく単なる偶然の一致ではないであろう。これら造形的な仕事のもつ反復的性質が、人格の不安定で方向づけられない衝動を制御することを助け、結局は、建設的な日課に服したことにたいする心地よい報酬を与えることになる。」^(*)。けだし治療の効果を持つのは、それが反復的な造形性においてまさにリズム形成をなしているからである。町づくりが「ゆとり」につながると見るのも、それが反復的な造形性を持ちうる限りであり、持続的な「育てる」にそれが実現すると見るからである。「都市は完成しない（住む人が入れ替わり立ち代りしながらも持続的に永遠に手を加え作り続けねばならない種類のものである）、」の都市はコミュニティと読み替えても、間違いではあるまい。

いわゆる町づくりへの住民参加の意味は以上で、おおよそのところは尽きるであろう。残るのは、手法であるが、ここでは一例として、ガーデニングの重要性について一言ふれておきたい。

「庭は内（家）から見る」（日本）対して「庭は外から見えるようにする」（欧米）とはよく言われることであるが、近代の日本は庭をブロックの塀で囲って、外からの目を遮断してきた。このことは、公共というコミュニケーションの母胎ともなるものから自らを隔離してきたとも言える。今日の外に開かれた庭づくり＝ガーデニングは、敷地の街路に面した部分のお化粧と言うにとどまらず、いままで閉ざされていたコミュニケーションに開口部を与えたことでもある。塀で囲まれているうちは、声のかけようもない。それが、「綺麗ですね」と街路と「私」との間でさりげない会話がかわされるようになる。話題が展開すれば、花の育て方、種のとりかた、手入れの仕方と心寛やかになる「ゆとり」の時間がそこに流れる——内発的コミュニケーションの場としての公共がそこに生成する。

山田和夫は「ゆとりと心の病い」という話の中で、ゆとりがストロークス（要するに、日常の挨拶ができるということ）に関係し、ストロークスなどによるゆとりがあってその人の長所が出るとを述べている^(*)が、現代人にさりげない挨拶が出来ない人が非常に多い事実を鑑みると、ガーデニングは従来言われる治療効果（いわゆる園芸療法）の他に、コミュニケーションをさりげないかたちで回復して、「ゆとり」を生み出す点でも注目してよいであろう。身近なところでは、夫婦でガーデニングをしている姿を見るようになった——夫婦間のコミュニケーショ

ン。植物を育てていて（＜育てる＞町づくりにおいても同じなのであるが）最も大きな意味の一つは、いわゆる「気づき」つまり「育てることを通して自分がより大きな力によって生かされていることを教えられる」ことに気づくことであろう——自然あるいは環境とのコミュニケーション。

こうした幾層ものコミュニケーションがあってはじめてコミュニティと言えるに足るコミュニティが生まれ、それこそSustainable Ghraとしての町が生まれる。

こう考えてくるとガーデニングは、ソフトとしての環境設計の要の一つでなくて何であろう。

最後に

素直に頭が下がるとき、仏の本当の姿が見えてくる。救いとはそういうことであると言われる。今日の我々は、どうであろう。一昔前ほど素直に頭の下がる自分をもっていないのではないだろうか。そうした事態への無意識的本能的な反応として、ゆとりを欠いた現代人と彼らの孤独につけこんだオウム教団の悲惨な出来事の関係は深いと言われる。善し悪しは別としても、オウム教団の存在は今、我々に深い疑問を投げかける。それは、神と言わないまでも、自分を超越るものをもたずして人はゆとりのある生を生きることができるのであろうか。自分を超越る存在に感謝し、事物を慈しむ素直な心無くして、真に血肉となる時の体験をつくることができるのかどうかということである。超越者を云々したが、しかしそれは指定された超越者である必要はない。否、現代における国際紛争の多くが宗教ともからんでいることから明らかに、むしろそれは危険であり、大切なのは他者あるいは自然を「かけがえのない存在」へとしていくこちら側（自己）の姿勢であり、アドルノの言う芸術という姿勢である。私が自己を超えた者と言ったのは、「気づき」の問題であり、むしろこうした能動的受容性の姿勢と相関する存在者である。超越者としてあらかじめ与えられる種類のものではない。この超越者を生み出さしめる契機となるのが、ここで言う優しい環境Sustainable Ghraであると重ねて言っておきたい。（了）

註

- 1 まとまりをもって「現れる」という性質。
- 2 オットー・フリードリッヒ・ボルノウ『人間と空間』大塚恵一他訳 せりか書房
- 3 NHK人間大学テキスト「日本の風土」。
- 4 NHK人間大学テキスト「森と文明」。
- 5 NHK放映・未来潮流「地球破産～ウォーターフロントからの警告～」
- 6 ロラン・バルト『モードの体系』佐藤信夫訳 みすず書房
- 7 岩波講座・現代社会学25「環境と生態系の社会学」P10
- 8 T・V・アドルノ『美の理論』大久保健治訳 河出書房新社
- 9 講談社現代新書『作ると考える～受容的理性に向けて～』
- 10 『アメニティを考える』ARM 未来社
- 11 山崎正和『演技する精神』中央公論社
- 12 高橋康也他訳 白水社
- 13 『現代都市の展望』中村純男訳 鹿島出版会
- 14 C・アレグザンダー『パタン・ランゲージ』平田翰那訳 鹿島出版会
- 15 NHK放映・金曜フォーラム『人・自然・風土の共生めざして』

- 16 『パーキングの環境デザイン』 ジム・マクラスキー 奥貫隆他訳 鹿島出版会
- 17 「車ではなく歩行者が支配的優先性をもち、歩行者の快適性が保証された居住機能性優位の地域のこと」『住みよい街づくり』OECD編 宮崎正雄 監訳 ぎょうせい
- 18 ルイス・マンフォード『都市の文化』生田勉訳 鹿島出版会及び前掲『バタン・ランゲージ』
- 19 樋口忠彦『日本の景観——ふるさとの原型——』筑摩文庫
- 20 イリア・プリゴジン『混沌からの秩序』伏見康治他訳 みすず書房
- 21 前掲『バタン・ランゲージ』
- 22 日本では、例えば大阪の高槻・阿武山団地一番街などに見られる。
- 23 中公新書
- 24 芦原義信『街並みの美学』岩波・同時代ライブラリー
- 25 NHK人間大学テキスト「建築・集落からの教え」
- 26 前掲『バタン・ランゲージ』
- 27 前掲『街並みの美学』なお、引用文中D、HのDは道幅Hは建物の高さを示す。
- 28 NHK放映人間大学特別シリーズ『安藤忠雄・私の「都市」論』
- 29 前掲『バタン・ランゲージ』
- 30 市川浩『＜私さがし＞と＜世界さがし＞』岩波書店
- 31 L・マンフォード『機械の神話——技術と人類の発達』樋口清訳 河出書房新社
- 32 東京大学公開講座『ゆとり』所収 東京大学出版会